

思想史研究というと、よくて外国の学説紹介史、悪くすると有名人誰彼の輸入代理店相互の正統・異端論争史という様相を呈するこの国。その知的風土を『建築という隠喩』を手掛かりに暴露した図星ゆえに、専門学会から白眼視された著作が『戦時下日本の建築家』として復活した。いわゆる帝冠様式が国策協力のファッションで、モダニズム様式がそれに対抗したとする通説は、戦後に捏造された神話だ。鉄鋼使用を50トンに制限した1937年の法令の物理的制限下で辛くも生き延びたのは「帝冠」ではなく、機能主義一点張りの「バラック」建設を提供しえたモダニズムの貧困の美学だ。その合理性が、神社建築の「純粋さ」と折り合ってモダニズムを超越せんとした「大東亜の新様式」は、時局柄もはや実現不可能だった以上、「戦争協力」というより、むしろ戦争逃避の夢ではなかったか。

様式というレッテルのパスサーージュの下に埋没した、実現しなかった歴史の「設計図」を洗いだし、隠蔽と顕示の交錯のなかに建築の歴史と歴史という建築との弁証法を立ち上げるこ

設計図と実測図とのあわいに宿る歴史

建築としての思想史

運取

三頁大宇・ラング・ス・文字
稲賀繁美

の井上唯一の手法は、田中純の『残像のなかの建築』とも共鳴する。装飾を抹殺させたがゆえに規範の異常肥大を結果したアドルフ・ロースから、建築を闊に還元してしまったグイトゲンシュタイン、ワイマールの実現せぬ夢を設計したブルーノ・タウトのユートピア建築と、その反対に血と大地の純粹培養をアインシュタイン塔に実現してしまったメンデルゾーン。そうした環境から逃避した堆積物の痕跡の迷宮に自我を託したシュグィッターズ。アメリカ型摩天楼に抑圧されていた建築的無意識を解き放ったために、機能主義が制御不能な怪物を剰余として折出させてしまったミース・ファン・デル・ルーエ。さらにはユダヤ人博物館に喪失の空虚の記憶を実体化させかねぬリベスキンドの逆説。歴史という傷に対する建築家の充足されえぬ欲望を関数に、モダニズムの精神史が描きあげられる。

その延長に思想史を構想した井上の『狂気と王権』、赤間啓之の『監禁からの哲学』。そして松浦寿輝の『エッフェル塔試論』、『思想の前線』の陳腐さを鼻白ませる快著群だ。